

厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)
分担研究報告書

高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究、失語症者の社会参加

研究分担者 種村 純 川崎医療福祉大学 教授

研究要旨 日常生活活動は自立し、失語症を含む障害のために一般就労困難な対象の実態を明らかにする目的で、就労支援A型及び就労移行支援施設における失語症者の就労支援の問題点と対応の実際を検討した。岡山県内の就労継続支援A型施設に対する郵送調査の結果、同施設を利用している失語症者はきわめて少数であった。就労継続支援A型施設を利用している失語症者では日常生活関連活動がほぼ自立していたが、聴覚的言語理解を含む高度なコミュニケーション能力および精緻な作業能力が職業生活上大きな阻害要因になっていた。本報告の就労支援施設において失語症者を対象に、実務教育と職場体験を中心とした組織的プログラムを進めている、特定の生産・販売業務を行っており、失語症者が可能な業務を行っている、失語症者にコミュニケーションを含む多様な活動から就労支援につなげている、などの支援が行われていた。失語症者の就労支援にあたって言語障害を受容し、就労に進めていくこと、言語障害による職務上の困難を補う工夫が必要であった。

A. 研究目的

失語症は、そのコミュニケーション障害のために就労に多大な困難を示す障害である。日常生活活動は自立し、失語症を含む障害のために一般就労困難な対象の実態を明らかにする目的で、就労支援A型及び就労移行支援施設における失語症者の就労支援の問題点と対応の実際を検討した。

B. 岡山県内の就労支援A型施設における失語症者の利用状況

目的 就労継続支援A型施設における失語症者の利用頻度を知ることが目的とした。

研究方法 岡山県内における就労継続支援A型68施設を対象に質問紙調査を行った。質問項目は失語症利用者の有無、失語症者が利用しているサービスの内容および失語症者を担当する職種であった。

結果 68施設中39施設から回答が得られ、回収率は57%であった。回答があった39施設のうち2施設に失語症者が在籍していた。失語症者が利用していたサービスはいずれも就労支援A型であった。両施設における失語症利用者の担当者は生活指導員、サービス管理者、その他であった。

結論 回答が得られた施設中で失語症者が在籍していた施設は2施設で、その比率は5%であった。この結果から就労継続支援A型を利用している失語症者は少ないと言える。これらの施設における失語症者の活動状況について、詳細な調査が必要である。

C. 失語症が利用している就労継続支援A型及び就労移行支援施設の訪問調査

目的 就労継続支援A型及び就労移行支援施設を

利用している失語症者の実際の活動内容を調査し、失語症者が就労継続支援施設を利用し、就労することに関わる問題点を検討した。

対象施設 就労継続支援A型及び就労移行支援施設のうち、失語症者が在籍している4施設を対象として、失語症者の活動状況について、失語症者の就労支援担当者に面接調査を行った。

調査内容 調査内容は施設の組織、規模、職員構成、失語症利用者の障害内容、発症からの経緯、サービスの利用期間、内容、支援方法、担当者の職種、社会的支援制度の利用、就労の要因、就労支援から見た就労の必要条件(コミュニケーション能力、その他)、転帰であった。

研究結果

施設の組織・概要

施設1)施設の組織・規模については、株式会社および社会福祉法人で、サービス類型は就労継続支援A型及び就労移行支援を行っていた。職員は全11名で、作業療法士6名、社会福祉士、発達障害分野の教員、経営・コンサルティングの専門家各1名であった。

施設2) 社団法人で、就労継続支援A型サービスを行っている。職員は5名で、サービス管理責任者1名、職業指導員4名であった。

施設3) NPO法人 家族会が母体である。就労継続支援B型と就労移行支援事業の両サービスを行っている。職員数は5名で、ソーシャルワーカー・社会福祉士2名、生活支援員2名、サービス管理責任者1名であった。

施設4) NPO法人、就労移行支援(一般型) 職員数22名。作業療法士1名、看護師1名、介護福祉士1名、サービス管理責任者2名、生活支援員17

名であった。

失語症利用者の特徴

施設 1) 利用者のうち失語症者は 2 名で、いずれも通所で、男性であった。原因疾患はくも膜下出血 1 名、脳外傷 1 名。年齢は 30 歳代および 50 歳代であった。1 名は片麻痺で運動失語、発話が困難で、携帯電話の読み上げ機能を代償手段として活用していた。もう 1 名は感覚失語で、読みと記憶の障害を合併していた。緊張するとことばが出にくくなり、職務内容の指示が理解できにくいため、手順書を必要とする。失語症の重症度としては中等度から軽度で、発症から 1 年以上 3 年未満であった。日常生活活動は両者とも自立しており、1 名は数字の処理能力に関連して預貯金の出し入れが困難であり、両名とも会話に若干の困難を示した。このサービスを受ける上での必要条件は就職したい、という強い意欲であった。自力で通勤できること本人とのコミュニケーションについて家族の協力が得られ、本人側では話しかけられたり、文字で示されたことを理解する努力を示し、文字・数字・絵・写真について理解する能力がある。数字・計算については個数を数えるときに数え直しが必要である。日付・時間については、予定の変更を紙に書いて示せば理解可能である。場所については、道に迷うことがあるが、慣れている場所なら行くことができる。書類は、書いたものが読めない。電話は、ことばが出ないが、自分と会社の名前くらいは言える。電話で複数の情報を扱うことができない。コミュニケーション行動では、自分から話しかけようとする。

施設 2) 施設利用者は 25 名で、そのうち失語症者は 2 名であった。失語型は運動失語 1 名、感覚失語 1 名であった。重症度はいずれも軽症で、1 名は発症から 3 年、もう 1 名は 20 年であった。日常生活活動は両名とも自立していた。就労への意欲があり、自力で通勤していた。聴いて理解することには制限があるが、文字を読むことで理解が可能であった。

施設 3) 失語症利用者は 6 名であった。施設利用者総数 17 名のうちで 35% を占める。原因疾患は脳血管障害で、30~50 歳代。重症度は軽度から中等度。発症 1 年~5 年。1~2 年間利用する。ADL、移動、公共交通機関の利用については自立しており、自力で通っている。自分の居る場所がわからない、という人はいない。買い物、食事の用意、預貯金の出し入れ、会話については家族の協力・支援が必要である。特にコミュニケーションに関しては、話だけでは伝わらず、文字、数字、絵、写真を示すことが多い。職場からの指示を本施設が受けて、本人・家族に伝えることもある。1 対 1 では会話を理解できるが、集団では伝わらない。本人も誰に電話して良いかわからず、本施設に電

話してくる。書類を書くことは困難で、契約に施設職員が立ち会うことがある。本人は契約内容を良く理解していない。携帯電話はみんな所持しており、休みの連絡をしてくる。メールは、「はい」など簡単な返事をよこす。

施設 4) 10 名。施設全体の利用者は 56 名のうちで 18% を占めた。原因疾患は脳血管障害 8 名、脳外傷 2 名。年齢は 9 名が 30 歳代から 50 歳代で、1 名 70 歳代であった。失語型では運動性失語が大半を占め、重症度は 9 名が軽度から中等度で、1 名が重度であった。発症からの経過期間 1 年未満から 10 年以上と多岐にわたるが、大半は 3 年から 10 年までであった。ADL/APDL について歩行、階段、入浴、外出は自立していたが、買い物、食事の用意、預貯金の出し入れ、会話については 1, 2 名が援助を要していた。

作業内容

施設 1) 就労移行支援サービスの期間は制度的に 2 年間であるが、1 年を目標としている。就労移行支援サービスの内容は、就労に関わるコミュニケーション行動について、評価訓練を行うと同時に、職業能力の評価、職場適応についてのアドバイス、社会資源の利用相談、家族・関係者への指導を含む。具体的な訓練内容はグループディスカッションで自分の意志を伝え、周囲との調和も図り、ソーシャルスキルトレーニングによって職場での問題解決に関わるような場面を小集団でのロールプレイングを行う。面接の準備訓練、パソコン作業訓練である。また職場実習を行う。

施設 2) 農業、弁当に入れる野菜を農園で作っている。販売や料理、弁当を詰める作業には向かない。施設 3) 幕張版のワークサンプル「ピッキング」を用いて、注文書にしたがって品物を揃える作業を行う。この課題では、注文書に書かれた品物や番号を手がかりとして、該当する品物を揃える作業を行う。実際の職場では、例えば流通サービスの職種において、倉庫等に保管されている商品棚から注文どおりに商品を揃えたり、職場内の文房具等の補充のために、保管場所から必要な文房具等を揃えたりする。また、文房具だけでなく、機械の部品や薬品などを、所定の棚から補充したり揃えたりする作業も考えられる。また、試供品の作製や掃除などの請負仕事を行う。事業所の実習を行って、就労に結びつけていく。

施設 4) 言語リハビリテーション、生活機能訓練、ジョブコーチ、職場内での支援を行っている。作業の手順説明がうまく理解できない際には実物を示す。失行がなければ一度理解したことは誤りなくできる。公園の掃除、草取り、トイレの掃除などを定期的に行っている。パザーを開催し、お汁粉を無料で配り、カレーライス、だんご、焼きそ

ばなどの人気メニューのほか、花や野菜、100円からの激安衣料や家族会手作りのグッズをそろえて、日ごろお世話になっている地域の皆さんとの交流の場となっている。全員で、太鼓の演奏にも取り組んでいる。

考察

就労支援施設 A 型および就労移行支援において就労意欲が高いこと、自ら積極的にこれらのサービスを希望して利用を開始している。活動内容の制限として、作業内容の聴覚的理解の障害により、手順書を必要とした。また、営業、事務の業務も困難であったが、身体的作業は可能で、農作業が行われていた。身体的作業のうちでは料理や弁当の詰め込みと行った精緻な作業は困難であったが、農作業のような粗大な作業は可能であった。

昨年度調査した就労継続支援 B 型における失語症者の実態、機能上の制限について比較検討すると、B 型に比べ A 型及び就労移行支援施設では、より多くの情報を処理し、より多くの作業に従事しており、通常の会話は可能であるが、APDL も自立していた。

支援の経過において、ハローワークで「ことばがしゃべれないから紹介先がない」と言われ、「仕事をしたい」というよりも「ことばをしゃべりたい」という気持ちが前面に出てしまうことがある。見学をして求人票を探すことで気持ちが変わっていく。履歴書を書いたり、写真を撮影したり、一緒にする、という支援を行う。プロフィールを書いておく、

「数字が苦手」、「ことばはゆっくりならわかる」といったことを職場の上司に伝える。

請負仕事としてケアホームの洗濯を行う際に、「取りに来ました」とか「ありませんか」といったカードを首から提げようにする。しゃべれるようになったらだんだんカードを減らしていく。週 3 日一緒に働くと、「4 時に終わる」、「乾燥はあと 10 分」といった会話が必要になる。エレベーターで「何階押して下さい」と言われてわからない。

仕事を紹介する段階で、求人票を見せて、わかるまで見せ、「行ってみる？」と訊く。仕事内容はその場で説明する。「見学に行ったら「やりたい」という。

失語症者はうまくしゃべることができないために仕事に就くことができず、言語能力の改善を求める。すべてのうまく行かない原因が言語障害のせいだ、と考える。現状を認めて社会に参加する、という意識がなかなか生じない。この問題を解決する経過には 2 種類がある。一つは現場での作業を経験することである。作業が可能であれば就労への意欲を促すことができる。失語症者は理解が可能であれば作業遂行は可能であり、作業手順を忘れることもない。もう一つは失語症者のために

環境を調整することである。文字で示す手順書が役に立つ場合が多い。この反対の対処法もあり、失語症者が適応可能な環境にするのではなく、実際には困難な作業を与えて、自らの障害に気づくことである。ピッキング作業は一見簡単に見えるが、失語症者の多くはこの作業が可能であると考えられるが、指示書通りにはなかなかできない。この課題は作業の内容を変えることで難易度を調節することが可能で、容易な課題から始めて、スモールステップで課題を設定することができる。自らの遂行レベルを認識してこそ積極的に職業訓練に関わることができる。これらの施設の利用者は既に医療機関とは離れており、失語症である、という情報自体が就労支援機関に伝わっていない。失語症者にとって作業それ自体よりも報告・連絡・相談が難しい。失敗したときに報告できることが就労上大切である。

結論

就労継続支援 A 型施設のうち、失語症者が利用していた施設は 5% と低値であった。A 型施設利用者の特徴は就労意欲が高く、日常会話でのコミュニケーション能力が保たれていた。一方、多量の聴覚的理解や精緻な作業、営業的コミュニケーションには困難を示し、就労継続支援 B 型施設を利用する失語症者に比べ、より高い水準の身体的およびコミュニケーション上の能力が必要であった。本報告の就労支援施設の組織形態と活動内容として以下の 3 種をあげた。株式会社であり、実務教育と職場体験を中心とした組織的プログラムを進めている。社団法人で特定の生産・販売業務を行っており、失語症者が可能な業務を行っている。家族会を背景とした NPO 法人で、失語症者にコミュニケーションを含む多様な活動から就労支援につなげている。失語症者の就労支援にあたって言語障害を受容し、就労に進めていくこと、言語障害による職務上の困難を補う工夫が必要であった。

研究協力者

後藤 祐之 社会福祉法人旭川荘 高次脳機能障害者支援室長

健康危険情報

知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

特になし

研究発表

1. 論文発表

- ・宮崎 泰広, 藤代 裕子, 今井 眞紀, 種村 純 : 数唱や無意味音列の復唱は可能であるが複数単語の復唱に困難を示した失語症例 言語性短期記憶についての一考察、高次脳機能研究 (1348-4818)34 巻 1 号 17-25(2014.03)
- ・山本 弘子, 八島 三男, 園田 尚美, 綿森 淑子, 種村 純, 中村 やす : 失語症の人と家族の生活の実像 全国失語症友の会連合会「失語症の方の生活のしづらさに関する調査 2013 報告書」より見えてくるもの、地域リハビリテーション (1880-5523)9 巻 4 号 264-271(2014.04)
- ・種村 純, 椿原 彰夫 : 視覚認知 同時失認、Clinical Neuroscience (0289-0585)32 巻 2 号、157-160(2014.02)

2. 学会発表

- ・太田 信子, 種村 純 : The Cambridge Prospective Memory Test 下位尺度化の検討(会議録)、神経心理学、30 巻 4 号 Page310(2014.12)
- ・宮崎 彰子(川崎医科大学附属病院 リハビリテーションセンター), 川崎 美香, 八木 真美, 後藤 圭乃, 種村 純 : 小児失語は改善したが、注意障害が残存した左利き左頭頂葉病変の一症例、言語聴覚研究11 巻 3 号、243(2014.09)

- ・宮崎 泰広, 種村 純, 新井 伸征, 椿原 彰夫 : アナルトリーを呈した失語症例における音読時の音韻的な手掛かりについて、高次脳機能研究 34 巻 1 号、124(2014.03)
- ・狩長 弘親, 用稲 丈人, 種村 純 : 高次脳機能障害者における調理の自立に関連する因子の検討 神経心理学的指標を用いて、高次脳機能研究 34 巻 1 号、104(2014.03)
- ・八木 真美, 用稲 丈人, 宮崎 彰子, 後藤 祐之, 種村 純, 平岡 崇, 椿原 彰夫 : 社会生活を阻害する行動障害を呈した一症例の支援経過(会議録/症例報告)、高次脳機能研究、34 巻 1 号、82(2014.03)
- ・中上 美帆, 宮崎 彰子, 逸見 佳代, 後藤 良美, 種村 純, 椿原 彰夫 : 物品の誤認を呈した外傷性脳損傷の一例、高次脳機能研究、34 巻 1 号、80-81(2014.03)
- ・種村 留美, 長尾 徹, 野田 和恵, 福永 志浦, 中田 修, 種村 純 : 記憶障害者に対する行動管理アプリの開発、高次脳機能研究、34 巻 1 号、73-74(2014.03)
- ・太田 信子, 種村 純 : Gateway 仮説に基づく展望 記憶過程の検討 the Cambridge Prospective Memory Test を用いて、高次脳機能研究 (1348-4818)34 巻 1 号 Page40(2014.03)